

## 第5回 結婚

カーストの成員は自分と同じカーストに属する者と結婚する義務がある（内婚）と同時に、同カースト内の特定の外婚集団に属さない者を配偶者に選ばねばならないのである。しかし、例外が生ずるのは世の常であり、上位カーストの男性が下位カーストの女性と結婚する順毛婚（アヌローマ）と、その逆の逆毛婚（プラティローマ）がある。前者はまあ大目にみられているが、後者はひどく嫌われカースト社会から追放される。10億を越す人口を抱えるインドとはいえ相手を見つけるのはすこぶる困難である。北インド、ウッタルプラデッシュで私の出会った王様（クシャトリア階層）は40歳で独身、なぜ独身かというと同じカーストの相手が近くにいないからという。またバラモンの青年は、「この地区には11の異なったバラモンカーストがあり、自分はその内上位の2カーストからしか貰わない」という。かつて、バングラデッシュで文房具屋カースト（ボニック）の結婚式に招待されたとき、新郎の村から100km近くも離れた地へバスに揺られて、ジョムナ川をわたり、またバスに揺られて花嫁を貰いに行く旅に付き添ったことがある（1986年1月）。写真8、9、10、11はガネッシュ（30歳）とショプナ（19歳）の結婚式。イスラム教徒の国で少数派のヒンドゥー教徒が相手を探すとすると大変な苦勞がいるものだと思った。

女性にとって辛いのは、同じカースト同士の結婚が理想とされるが、男性が上位カーストなら大目に見られるが、逆の場合は絶対に許されない。となるとバラモンの女性は最悪の状況に置かれることになる。さらに、男性の再婚は認められるが、女性の場合はタブーとされている。上下貴賤のカースト体系においては、女性側は自分よりやや高い男性を望むことになる。成功すれば彼ら一族郎党の地位が上がると思われるからである。この地位上昇志向をサンスクリタイゼーションという。さて、これでめでたしかと言うと、そうではなく次にダウリという悪習がまっている。ダウリの悲劇は今もあとをたたない。

ヒンドゥー教徒の父親にとって、子供を自分の家系にふさわしい家柄の異性と結婚させることは、宗教的・社会的義務であった。しかし、現実には厳しく、そのため古くから幼児婚の風習があったり、最近では、新聞に結婚広告を出したり、花婿を掠奪する事件さえ起っている。

インドには「マハラジャ（藩王）でも娘を3人持つと破産する」という諺がある。それほどインドの女性の結婚には金がかかるということだが、その元凶は花嫁の父から花婿側に支払われるダウリ（持参金）である。持参金の額は、相手男性のカーストや社会的地位によって異なるが、月収500ルピー（約6,000円）の下級公務員でも3万ルピー（36万円）する。これに、衣裳、宝石、家具を持たせ、時には冷蔵庫、テレビといった電気製品をつけるので、花嫁の父の負担は相当なものになる。それでも、「嫁入り道具が少ない」「持参金が少ない」といっては、夫や姑から責め立てられ、耐え切れなくなった花嫁が焼身自殺したり、夫に焼殺される事件がいまだに起っている。寡婦再婚も忌み嫌われており、インドの女性の地位は想像以上に低いのが現状である。



写真8 花嫁の家の庭での結婚式

新郎（ガネッシュ 30歳）新婦（シヨプナ 19歳）1986年



写真9 カレーを塗られた新婦

新郎も塗られる。洗い落とすとき、交代に頭を上下に置き、その滴が相手の頭に落ちるように水を流す。



写真10 お色直し  
友人が幾何学的な模様を描く。



写真11 13年後のガ  
ネッシュ家族 (1999)  
2004年8月に訪ねた  
時、旦那が病気静養の  
ため家族揃って奥さ  
んの実家に出かけて  
いた。